

# 獅子考

## － 獅子像と獅子舞の考察 －

佐 藤 考 一

桜美林大学リベラルアーツ学群

### A Study of Lion Statues & Lion Dances

SATO Koichi

College of Arts and Sciences, J. F. Oberlin University

キーワード：ライオン、獅子頭、獅子像、獅子舞、シーサー、狛犬

#### 一、はじめに

獅子とはライオンのことである。だが、石造りの獅子や木製を中心にした獅子舞の獅子頭に表現されたその姿は、世界各地で随分異なっている<sup>1</sup>。若い頃から海外で、あるいは国内で、多様な獅子像のデザインを見て、どうしてこうも違うのかと、不思議に思っていた。本稿においては、ライオンの分布と獅子像の関係、そして東南アジア、日本本土と沖縄、中国等の東北アジアを中心に、筆者が実際に見て撮影した、獅子像の実例の写真と、荒俣宏、上杉千郷、たくきよしみつ等の先行研究<sup>2</sup>の検討から、その多様性のあり方を考えてみたい。

#### 二、ライオンの分布と獅子像の関係

かつてライオンは、アフリカ、アラビア半島、ギリシア、小アジア、インドにまで分布していたが、紀元前100年頃にギリシアで滅んでから各地で減少し、20世紀前半にはイラク、イラン、モロッコなどから姿を消し、現在ではアフリカとインドの一部を除き、絶滅した<sup>3</sup>。かつてライオンが分布していた地域、およびその地域を植民地にしていた国々の人々はライオンを見ており、彼等が作った石の獅子像は、歴史的に古い、新しいを問わず、写実的だ。筆者が2011年2月20日に大英博物館で見た、紀元前2世紀の古代ギリシ

アのクニドス（現トルコ：写真1）の獅子像などは、非常に生き生きとしている。また、インドやその移民のいるシンガポールのヒンドゥ寺院のライオン像も同様だ（写真2、1989年頃撮影）<sup>4</sup>。



写真1



写真2：ドゥルガー女神と獅子

古代の人々にとって、ライオンは大地の野生的な力を象徴し、また死をもたらす破壊神に結びつく契機も与えた（以下、荒俣〔2000〕6-66頁）。従って、その生息地に居住していた古代の王侯たちや宗教指導者たちは、ライオン狩りの図や、都城や寺社の門の飾り、墓所を守るシンボルにライオンを使い、さらにライオンに乗る、あるいはライオンを服従させる構図の、神や王侯自身の像を作ることで、神・王・英雄の強さを示そうとした。それが、このような写実的な獅子像を生んだと考えられるのである。

### 三、獅子像の東アジアへの伝播と変容①インドから東南アジアへ

獅子像は、やがてインドから仏教やヒンドゥ教と共に東南アジアへ、また仏教と共に中国を経て日本や朝鮮半島へ伝わって行った（荒俣〔2000〕66-96頁、上杉〔2001〕10-22頁、304-321頁）。なお、中国から沖縄へは、冊封体制下で日本を経ず直接伝わったものもあり、東南アジアのチャイナタウンへは19世紀以降に、中国からの移民が広めたものもある<sup>5</sup>。東南アジアにも、東北アジアにもライオンはいない。したがって、この辺りから獅子像は写実性を失い、逆に言えばそれを作る石工の想像力と鑿を用いる技術、そして製作に使われた石や木などの素材の性質によって、変容していく<sup>6</sup>。

本節では東南アジアに伝わった事例を2つほど見ていこう。まず、8世紀ごろに完成したと言われるインドネシアのジャワ島のボロブドゥール遺跡である<sup>7</sup>。ボロブドゥールは、1辺120尺の方形の基壇に仏陀の生涯を示すレリーフや彫像が飾られており、高さは35.29尺、安山岩で出来ており、獅子像もある。2010年8月30日に筆者が現地を見た、この獅子像は1対になっていて、双方とも口を開けているのだが、どう見ても獅子というよりは猿のような顔つきであった（写真3）。

次に、12世紀前半にカンボジアのシエムリアップに建設されたアンコール・ワットで

あるが、こちらは南北 1300<sub>ドム</sub>、東西 1500<sub>ドム</sub>の長方形で、中央の塔の高さが 65<sub>ドム</sub>、砂岩のブロックを積み上げて建造されたヒンドゥ寺院である<sup>8</sup>。神像を祀った塔への参道に、ナーガ（竜神）像とともに獅子像が配置されている。筆者は、1994 年 4 月 3 日の訪問時にアンコール・ワットやアンコール・トムの遺跡を見て回ったが、残念なことに素材が脆い砂岩のため、長い年月、風雨にさらされ、風化して彫刻の顔が落剥しているものが多く、獅子像の表情が窺えなかった。このため、その表情は 2018 年 8 月 6 日にカンボジアを再訪して、プノンペンで実見した現代カンボジアの獅子像から想像するしかない（写真 4：2018 年 8 月 6 日）。こちらの方がボロボドゥールの獅子像よりはライオンらしいが、やはりその表情はかなりデフォルメされており、鼻の形状などは豚のようなのだ。



写真 3



写真 4



写真 5

#### 四、獅子像の東アジアへの伝播と変容②中国から日本、沖縄、東南アジアへ

獅子像は、インドから仏教とともに中国へ伝わり、中国から日本へ、あるいは沖縄へ、さらには 19 世紀以降の中国南部の移民と共に東南アジアのチャイナタウンに伝わった。インドから中国への獅子像の伝播は、シルクロードを通して入ってきたオリエントの獅子像と、西南インドより同じくシルクロードを通り、仏教の獅子座となって渡ってきたインドの獅子像との二系統があるという（上杉 [2001] 36-39 頁）。時期的には、仏教が伝来したのが、後漢の初め（1 世紀）であるとも言われるが、唐の時代の玄奘三蔵の天竺への大旅行（629 年）などもあり、何度も往来があったと見るべきであろう<sup>9</sup>。初期の獅子像は、より写実的でライオンに近いものもあったという（上杉 [2001] 38-39、80 頁）。また、古代オリエントでは、ライオンそのものを見せる獅子使い（ライオンの調教師）の例もあったらしい（上杉 [2001] 286-292 頁）。これが、獅子使いが獅子を踊らせる現在の獅子舞の起源だったのではないかという（上杉 [2001] 292 頁。写真 5:2015 年 1 月 2 日、東京。毬を使って、獅子をじゃれさせるシーンである）。

ちなみに、本物のライオンを中国人が見たのは、漢の武帝（紀元前 156 ～ 87 年）の時代だという（上杉 [2001] 20 頁）。さらに、15 世紀に鄭和が南海遠征でアフリカに赴いた

際、生きたキリンとライオンを持ち帰った<sup>10</sup>。残念ながらライオンの画が残っているのかどうかについては不明であるが、現存する当時のキリンの画は、中国の想像上の麒麟のそれではなく、非常に写実的なキリン像であるので、恐らくライオンもその本来の姿が伝わったはずである<sup>11</sup>。だが、これは中国の獅子像には大きな影響を与えなかった。中国（特に中国北部）の獅子像は、想像上の動物、霊獣としてのそれであり、いわゆる唐獅子風のイメージが唐代には完成していたからである（上杉 [2001] 22、28 頁：写真 6：紫禁城、1983 年 3 月 1 日）。そして、中国北部から日本に伝わった獅子像もそれである<sup>12</sup>。中国北部から日本へ獅子像が伝わったのは、仏教の獅子座としてで、5～6 世紀のことと言われる（上杉 [2001] 16 頁）。これが普遍的になったのは仏教が定着した天平時代から平安時代にかけてであり、遣唐使として中国へ渡った天台宗の円仁（794～864）等の僧侶が信仰の対象とした文殊菩薩の乗り物としての獅子像や、愛染明王の獅子冠（写真 7：高尾山有喜寺、2016 年 4 月 16 日）などの形で、日本に知られるようになった<sup>13</sup>。日本へ本物のライオンが来たのは、1866 年（慶応 2 年）、動物園での飼育は 1902 年（明治 35 年）が初めてで、だいふ時代が下ってからなので、日本人の獅子像のイメージも、ほぼ唐獅子風のもので定着していたのである<sup>14</sup>。



写真 6



写真 7

## 五、残された疑問：中国北部と南部の獅子舞の変化、有角獅子と狛犬、沖縄の屋根獅子

では、ライオンのいない中国で写実性を失い変化した獅子像は、中国北部と南部で獅子舞の獅子頭などについて、全て同じだったのだろうか？ 日本や沖縄に伝わった獅子像に、変化は起らなかったのか？ 現物や報道写真などの獅子像を見ていて疑問は尽きない。中国の北と南での獅子舞の変化、有角獅子、沖縄の獅子、そして狛犬について考察してみたい。

獅子舞の変化については、荒俣氏や上杉氏、たくき氏の著書では詳述されていない。だが、筆者が獅子舞の獅子頭を見た限りでは、中国北部から日本本土や沖縄に伝わった獅子頭と、中国南部から東南アジアに伝わった獅子頭は、明らかな違いがある。中国から日本、沖縄に伝わった獅子舞の獅子頭の多くは木製<sup>15</sup>で、多少のデザインの違いはあっても、

皆唐獅子風なのであるが(写真8、写真9)、中国南部から東南アジアに伝わった獅子頭は竹の骨組に布張りで、顔つきが異なる(写真10、写真11、写真12)<sup>16</sup>。

これについては、2003年1月30日付のシンガポールの英字紙ストレーツ・タイムズに記述がある<sup>17</sup>。それによると獅子舞には、大きく分けて2つのタイプがあるという。猫を模した北の獅子(筆者の表現でいう唐獅子風)と、犬を模した南の獅子がそれである。北の、あるいは北京の獅子は短軀でがっしりとしていて、毛でおおわれている。これは、古代には皇帝や外国の使節をもてなすためのものだった。南の獅子は福建系と広東系に分かれる<sup>18</sup>。

さらにストレーツ・タイムズの記事は、「獅子は中国の皇帝が夢の中で、自分の軍隊とはぐれ、パニックになり始めた際に現れ、皇帝を守り、無事に宮殿へ導いた不思議な外見の動物だった」とし、「皇帝がその夢の話を臣下にしたところ、臣下の1人がその動物は西方のライオンという生き物に似ていると述べたことがきっかけで、今日まで幸運のシンボルとされるようになった」としている。皇帝の夢に出てきた動物を形にしたわけで、本物のライオンを見た訳ではないので、かなり写実的なものから離れた形態になった理由もそこにあるのだろう。そして、身近な動物を模して獅子像が形成されたのだが、それが猫の場合と、犬の場合があったということである<sup>19</sup>。ストレーツ・タイムズの記事は、さらに獅子舞は唐代から始まり、結婚式、店の開店記念や周年記念、旧正月等の重要な儀式やお祭りの際には、幸運を招くものとして、重視されているとしている。



写真8：八王子市南大沢囃子連の獅子舞 一人獅子 2019年1月1日



写真9：沖縄の獅子舞(那覇空港のイベント) 2001年12月9日



写真10：シンガポールの獅子舞 一人獅子 2003年9月9日



写真11：ベトナムの獅子舞(テトを祝う絵画) 2001年12月9日

その獅子舞であるが、中国・東南アジア・沖縄のものと、日本本土のものではだいぶ違いがある（表-1）。中国の獅子舞は北部のものも南部のものも、2人組で後ろ足の担当者が前足の担当者を肩車するなど、動作が激しく、伴奏もドラや太鼓の大きな音を伴うが、北部の獅子舞が床や地面などの平面上での動きのものが多いのに対し、南部の獅子舞の方はポールの上で曲芸を行う場合があり、より立体的でダイナミックである<sup>20</sup>。東南アジアの獅子舞は中国南部と獅子頭の形状も動きも同じである（写真12）。沖縄の獅子頭や衣装は福建省泉州などと同じで着ぐるみに近いもので、獅子舞の動作は激しい（写真9・13）<sup>21</sup>。福建省は、地域によって、猫を模した獅子と、犬を模した獅子の双方があるようだ<sup>22</sup>。我々が知る鉦と太鼓と笛の軽妙な音曲を伴う、薄い油単<sup>23</sup>姿の優雅な日本本土の獅子舞（写真14）とはだいぶ違う。また、獅子を1人で演じることがあるのも（1人獅子）、日本だけだと言われる<sup>24</sup>。

なお、中国南部や、そこから東南アジアへ伝わった獅子舞の獅子頭については、犬を模したのがあることは、はっきりしているが、石や陶器などで作られた獅子像では、中国南部でも、東南アジアでも、犬を模したものは、写真15の例ぐらいで筆者はあまり見たことがない（写真15：2018年3月26日）<sup>25</sup>。

表-1 獅子舞の分類

	獅子頭	衣装	人員	伴奏	動作
中国：広東・東南アジア	犬	着ぐるみ	2名	ドラ・太鼓	肩車・激しい
福建・東南アジア	犬	着ぐるみ	2名	ドラ・太鼓	肩車・激しい
福建泉州・福州	猫	着ぐるみ	2名	ドラ・太鼓	肩車・激しい
北部	猫	着ぐるみ	2名	ドラ・太鼓	肩車・激しい
日本：沖縄	猫	着ぐるみ	2名	ドラム	肩車・激しい
本州	猫	油単	1~2名	鉦・太鼓・笛	肩車は珍しい・優雅

（筆者作成）



写真12：東南アジア（シンガポール）の舞獅子舞 2001年9月4日



写真13：沖縄の獅子舞 琉神の演武舞 2016年1月2日月1日



写真 14：東京 一人獅子（金獅子） 2006 年 1 月 3 日



写真 15：シンガポールの犬を模した獅子像



写真 16・17：高尾山麓氷川神社の有角獅子

日本に伝わった獅子舞の変化の事例については、自ら太鼓を叩く有角獅子と、獅子と狐を一緒に舞わせる事例について、触れてみたい。自ら太鼓を叩く有角獅子は、高尾山麓の氷川神社の獅子舞で筆者が実見したものであるが、角は2本で鬼の角をやや伸ばしたような形状で、雄獅子2頭が雌獅子をめぐる争うシナリオで、自ら太鼓を叩いて踊る（写真16・17：2017年8月20日）。こういう事例は、埼玉県や奥多摩の氷川神社、大氷川神社系列の神社に多い<sup>26</sup>。大氷川神社の獅子舞は寛政4年（1792年）以前にまで遡るという<sup>27</sup>。



写真 18：南大沢囃子連 獅子・狐舞



写真 19：沖縄県立博物館の村落獅子

獅子と狐を一緒に舞わせる事例は、八王子市の南大沢囃子連が正月に実施しているもので、南大沢に大正初期から伝わる郷土芸能だという（写真18：2018年1月1日）<sup>28</sup>。

次に、沖縄に伝わった獅子像であるが、沖縄ではシーサーと呼ばれる。最古のシーサーは、15世紀に那覇市の末吉宮の建造で作られたものと言われるが、他に玉陵（王墓）の屋上や、御嶽、村落の入り口に置かれ、その守りとされた<sup>29</sup>。沖縄県立博物館の入り口におかれた琉球石灰岩（粟石）製の村落獅子などは、製作年代は不明ながら素朴な味わいのある表情である（写真19：2018年6月20日）。ユニークなのは、明治22年（1889年）以降、一般家庭に瓦屋根が許されるようになり、瓦やその欠片、漆喰などで造形されるようになった屋根獅子である<sup>30</sup>。屋根獅子は、それらを作成した屋根左官がライオンを意識しない人も多かったと考えられ、さらに素材の制約があったことから、中国由来の唐獅子風の獅子像とは異なる、一種独特の風貌をしているものも多い（写真20：2018年6月21日、写真21：2018年6月20日）。割れ瓦が醸し出す、太いタッチのデザインや尻尾の形状が面白い。

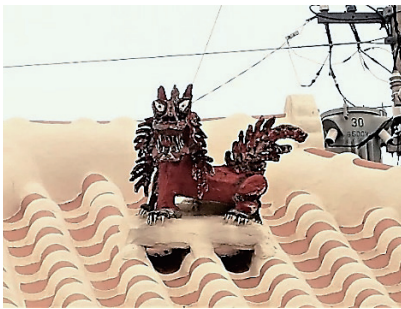


写真20：那覇市内の民家の屋根獅子

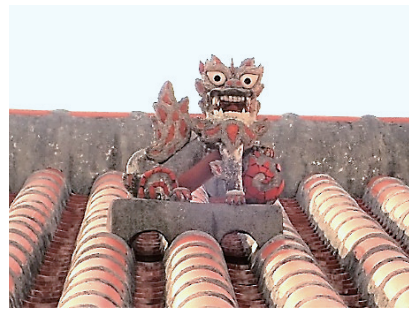


写真21：沖縄県立博物館の屋根獅子

最後に狛犬であるが、オリエントから中国を経て霊獣として日本に入った獅子像は、狛犬に変化する（上杉〔2001〕100-103頁）。狛犬は近世までは「獅子・狛犬」で一組、寺社で角のない方を獅子と呼び（寺社側から見て左配置、開口の「阿型」）、一角獣の方を狛犬と呼んでいたものが（寺社側から見て右配置、閉口の「吽型」）、「獅子・狛犬」一対を略称して「狛犬」と呼ぶようになったのだという（上杉〔2001〕104-114頁。写真22：高尾山有喜寺、但し無角。2021年7月25日）。だが、時代が下って、狛犬が獅子化し、（角のない）左右同じものが置かれるようになったとされる（上杉〔2001〕117頁）。筆者は、石を素材とする狛犬に角がないものがあるのは、突出した角を1つの石材から彫り出すことが技術的に難しかったためではないとも考えている（写真23：京都 高台寺：2018年1月28日。木製で有角、彩色）<sup>31</sup>。古い狛犬の形状には、唐獅子風からも外れ、人の顔のようで、面白いものもある（たくき〔2006〕36頁）。



写真 22

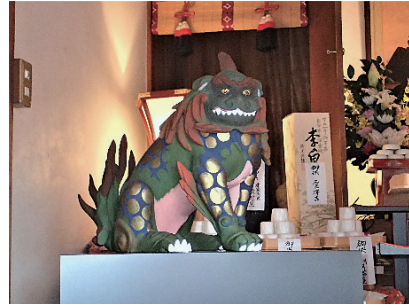


写真 23

## 六、おわりに

本稿では、筆者がこれまで見てきた石造りを中心とした獅子像や、獅子舞の獅子頭の多様性の理由を、先行研究の成果を参考にしながら考えてきた。獅子像や、獅子頭の表情は、過去あるいは現在のライオンの分布地域では写実性を伴うが、ライオンが分布しない地域では想像上の産物となる。日本本土・沖縄や東南アジアでは、中国からもたらされた獅子像の原型の南北での違い、石工・木工・屋根左官などの技量による表現力、想像力の差や、ライオン・犬・猫・猿など、モデルの違い、自然石・木・瓦と漆喰など、素材の材質の違いなどで、大きく異なってくる(最近の沖縄のシーサーには怪獣の様なものもある)。また、狛犬の原型が獅子像であり、近代の狛犬が獅子化していることも理解できた。だが、木製、陶器製の獅子像を中心に見聞が足りないし、まだ、分からないことも多い。他日を期したい。

## 注

- 1 ここでは獅子と獅子舞の獅子頭を合わせて、獅子像と呼ぶ。取り上げた獅子像の多くは石材を鑿で彫ったものである。近年は、日本の狛犬等の事例にみられるように、ダイヤモンドカッターなども使われている。また、日本の獅子舞の獅子頭は木製である。以下、たくきよしみつ『狛犬がみ』バナナブックス、2006年、103頁。他に、木製、陶器製などがある。「獅子頭－作り方、製作工程」<https://nohmask21.com/shishi-process.html>, accessed 24 July 2021, (上杉 [2001], 321頁)。
- 2 荒俣宏氏や上杉千郷氏、たくきよしみつ氏等の参考文献については、文末にまとめた。
- 3 『標準原色図鑑全集 / 別巻「動物 II」』、保育社、1968年、71-72頁、(荒俣 [2000] 6頁)、(上杉 [2001] 10-15頁)、<https://kotobank.jp/word/%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%82%AA%E3%83%B3-146685>, accessed 11 July 2021.
- 4 写真2はシンガポールのヒンドゥ寺院のもの。インドの事例は、(荒俣 [2000] 51頁)。
- 5 沖縄の事例については、(上杉 [2001] 320頁)を参照。シンガポールでの事例については、鶴山派の獅子舞は1920年から始まったという。<http://sghoksan.blogspot.sg>, accessed 13 July 2021.
- 6 現代のダイヤモンドカッターのような電動工具のない時代は、素材となる石の材質と石工の鑿さばきで、獅子像の出来栄に差が出たであろう(たくき [2006] 103頁)。

- 7 以下、Larisa, *The Magnificence of Borobudur*, Kompas Gramedia, 1995, pp.1- 57, および現地ガイドからの2010年8月30日のヒアリング、(荒俣 [2000] 66-73頁)。
- 8 伊東照司「アンコール・ワット」石井米雄他監修『東南アジアを知る事典』平凡社、1986年、14-15頁、(荒俣 [2000] 66-73頁)。
- 9 (上杉 [2001] 36、81-83頁)、(荒俣 [2000] 80-85頁)。他に、溝口雄三他編『中国思想文化事典』東京大学出版会、2001年、299頁。
- 10 寺田隆信『中国の大航海者 鄭和』清水書院、1984年、128頁。
- 11 寺田、前掲、128頁。
- 12 正倉院に伝わる御物の中には、「花樹獅子人物文白椽綾」のように、シルクロード由来のオリエンタ系の織物で、写実的なライオンをあしらったものがあるが、このライオンの画が、庶民の目に触れることはなかった。『年次報告－正倉院－宮内庁』、<https://shosoin.kunaicho.go.jp/api/bulletins/23/pdf/0000000039>, accessed 20 July 2021.
- 13 (荒俣 [2000] 80頁)、(上杉 [2001] 16-18頁)、「円仁」『大津の歴史データベース』、<https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/db/jiten/data/216.html>, accessed 20 July 2021, 「寺宝と文化財」(渡海文殊)、安倍文殊院、<https://www.abemonjuin.or.jp/treasure/>, accessed 20 July 2021, 「愛染明王坐像」、東京国立博物館、[https://www.tnm.jp/modules/r\\_collection/index.php?controller=dtl&colid=C1858&t=now](https://www.tnm.jp/modules/r_collection/index.php?controller=dtl&colid=C1858&t=now), accessed 20 July 2021.
- 14 『標準原色図鑑全集/別巻「動物Ⅱ」』、保育社、1968年、72頁。
- 15 「獅子頭－作り方、製作工程」前掲。
- 16 中国北部の獅子頭については、「河南鄭州の獅子」『人民日報海外版』2019年1月14日、1頁、「中国、獅子舞で旧正月の新年祝う 春節迎え縁日「庙会」開催(北京)」『西日本新聞』2019年2月5日、<https://www.nishinippon.co.jp/item/o/484616/>、日本本土の獅子舞については写真8を、沖縄の獅子舞については写真9・写真13を、東南アジアの獅子舞については、シンガポール(写真10・写真12)、ベトナムの獅子舞の絵画(写真11)、獅子頭については<https://www.youtube.com/watch?v=BvHGXc4f9x4>、を参照。
- 17 “The Lion Stirs…,” *Straits Times*, 30 January 2003, p. H4, (佐藤 [2004] 93-104頁)。なお、中国の獅子に南北で違いがあることは、「特色獅子、独具魅力」『毎日頭条』2017年5月25日、<https://kknews.cc/news/bokg3r9.html>、などの記事にも記述がある。
- 18 注17に同じ。さらに広東系は仏山と鶴山に分かれる(仏山も鶴山も広東省の市の名)。
- 19 上杉千郷氏は、日本の狛犬について、ライオンを見たことがない石工や陶工が、獅子や狛犬を犬の一種と考えて、様々な表情や姿態の狛犬を製作したのであろうとしている(上杉 [2001] 168頁、181頁、273頁)。これらの中には、猿、虎、猿、猿、狐等に似たものまでであるという。獅子像についても、同じような変容が起ったと見るべきであろう。
- 20 獅子舞は中国武術の一種である。「滄県獅子舞 中学校で技術伝授(河北省)」『中国網\_\_日本語』2017年4月27日、[http://japanese.china.org.cn/culture/201704/27/content\\_40702659\\_2.htm](http://japanese.china.org.cn/culture/201704/27/content_40702659_2.htm), accessed 28 March 2021, 「中国、獅子舞で新年祝う 春節迎え縁日開催(北京)」[https://www.youtube.com/watch?v=FviHHksO\\_d4](https://www.youtube.com/watch?v=FviHHksO_d4), 「舞獅玩具(福建省)」<https://world.taobao.com/product/wap/%E8%88%9E%E7%8D%85%E7%8E%A9%E5%85%B7.htm>, accessed 6 October 2021, などを参照。
- 21 一般に中国・東南アジアの獅子舞は、獅子頭のデザインを除けば、写真10のような下半身は着ぐるみ、上半身はTシャツで、その上から獅子頭と厚手の毛皮を被るものである。福建省泉州の獅子舞については、(荒俣 [2000] 79頁)、を参照。
- 22 犬を模した獅子については、注17を参照。猫を模した獅子については、泉州の事例:(荒俣 [2000] 79頁)、福州の事例:「獅子舞で福を呼ぶ 福州市日本企業会 2月度定例会」<https://4travel.jp/travelogue/10312828>, accessed 22 July 2021, を参照。

- 23 日本の獅子舞では、演者は獅子袴もしくは裁っ着（たっつけ）とよばれるズボンを着用し、獅子頭を付けた油単（ゆたん）と呼ばれるマント状の衣装をその上に被る。中国の着ぐるみとは異なる。「獅子舞衣装＝獅子舞油単」<https://nohmask21.com/shishiyutan.html>, accessed 23 July 2021.
- 24 (上杉[2001] 301頁)。東京の獅子舞は一人獅子が多いが、日本にも岩手県などに二人獅子の事例はある。「被災地に新年の舞」『朝日新聞』2012年1月3日、39頁。兵庫県赤穂市の獅子舞の昇肩（しょうかた）は、二人獅子で後ろ足の演者の肩の上に、前足の演者が片足で立つ曲芸である。「赤穂の獅子舞」『西有年獅子舞保存会』2018年4月25日、<https://www.city.ako.lg.jp/channelako/nishiune.html>, accessed 15 October 2021.
- 25 中国では海南島の獅子像の中に、鰐のような顔つきのものがあるそうだが、筆者は未見である（荒俣[2001] 85頁）。
- 26 「山里の獅子舞を追い25年」『朝日新聞』2016年11月30日、28頁、「大氷川獅子舞」『奥多摩町』、2016年7月18日、[http://www.town.okutama.tokyo.jp/kurashi/kyoiku/bunka-sports/kyoudo\\_geinou/ohikawa.html](http://www.town.okutama.tokyo.jp/kurashi/kyoiku/bunka-sports/kyoudo_geinou/ohikawa.html), accessed 9 July 2021.
- 27 注26を参照。
- 28 「伝統と『賑わい』広める」『タウンニュース』2016年12月1日、<https://www.townnews.co.jp/0305/2016/12/01/359639.html>, accessed 22 July 2021.
- 29 (上杉[2001] 307-317頁)。現存する村落獅子の最古のものは、東風平町字重盛にあり、1689年に設置されたものである（沖縄県教育委員会編『沖縄の文化財Ⅳ 無形・民俗文化財編』、1998年、86頁）。
- 30 大塚清吾『写真集 沖縄の屋根獅子』葦書房、1984年、46-56頁。
- 31 目立つ一角や枝分かれした尾の狛犬は、細工のし易い木製のものが多い。高台寺の狛犬はその一例だ（2021年8月3日の電話による筆者の、高台寺への問い合わせによる）。

## 【参考文献】

- 荒俣宏『獅子』集英社、2000年。  
 上杉千郷『狛犬事典』戎光祥出版、2001年。  
 たくきよしみつ『狛犬かがみ』バナナブックス、2006年。  
 佐藤考一『獅子の町・海峡の風』めこん、2004年。